

村上 善男（むらかみ・よしお）

1、プロフィール

生涯にわたり、現代美術の旗手として国内外で高い評価を受けた村上善男は、文筆家としても活躍。北奥の民俗と風土に根差した評論などを多数残した。

<生没>

1933(昭和8)年3月14日～2006(平成18)年5月4日

<代表作>

『仙台屋台誌』『津軽北奥舎201』『北奥百景』『浮游して北に澄む』

<青森との関わり>

父親が現・藤崎町出身。盛岡に生まれ、晩年の20数年間を独立した美術家、弘前大学教授として弘前市に在住。

2、作家解説

村上善男は1933(昭和8)年3月14日、父千代吉、母節子の長男として岩手県盛岡市に生まれる。村上家は代々染色業「越後屋」を営む。

父千代吉は富木館村(現藤崎町)久井名館の出身。村上家へは婿養子として入ったが村上が6歳のとき母節子が病死、ほどなく父千代吉が再婚のため村上と弟を残し家を出、以後祖父母に養育される。この幼児体験がのちの創作に大きな影響を与える。

1953年第38回二科展に入選。岡本太郎の知遇を得たことから本格的に画家としての歩みを始め、60年代に入り発表した注射針をキャンバスに鏤めたアッサンブラージュが画壇に認められ、以後生涯にわたって現代美術の旗手として活躍する。

また村上は岩手大学学芸学部国文科の出身であり、画業と並行して早くから評論、エッセーなどの執筆活動を開始した。その執筆は仙台時代に書かれた『印壓と風速計』『仙台屋台誌』という考現学エッセーを皮切りに『津軽北奥舎201』

『仙台起繪圖』『盛岡風景誌』『北奥百景』などの民俗学的エッセー、萬鐵五郎や松本竣介ら同郷の画家、及び岡本太郎をはじめ国内外の現代美術家に関する美術論、そして宮澤賢治、萩原朔太郎、寺山修司などに関する文学論と、その分野は極めて広範にわたっている。

そういった一連の執筆活動は、村上が独自に確立した民俗学的作風の「釘打ち圖」シリーズに代表される画業と密接な関連性を持っている。また、村上は美術家でありながら一方では椽木弘という優れた詩人であり、その文体は詩的であり、岡本太郎が村上の作風を「冷たい計算から発している」と評したように、抑制の利いた極めてストイックでダンディズムに貫かれていながら、暖かみがあるのが特徴的である。

2006年5月4日に盛岡の自宅でその生涯を閉じた。享年 73 歳。

3、資料紹介

○「北奥氣圈」第3号 特集「ことばと美術」—椽木弘・村上善男

雑誌

2007(平成 19)年5月4日

210 mm × 210 mm

美術家村上善男と詩人椽木弘(同一人物)の没後一周忌に合わせ弘前市の書肆・北奥舎から発行された特集号で、田中久元編「村上善男はかく語りき」や鎌田紳爾「村上善男論《対位法的迷宮論》」、雪雄子「闇の浮力」、船越素子「欲望のかたち—『塩景』を読む」など村上善男、椽木弘の人物論、作品論、オマージュ、などが掲載されている。